

# 里の不在— 『もののけ姫』の衝撃

野田研一

立教大学大学院

異文化コミュニケーション研究科

金沢大学附属図書館  
〈環境学コレクション〉推進事業  
公開シンポジウム 里山×里海×文学

# 内容

- I 『もののけ姫』の（私的）衝撃
- II 脱ウィルダネス論
- III 他者としてのウィルダネス

# I 『もののけ姫』の（私的）衝撃

宮崎駿監督  
『もののけ姫』  
1997年7月公開





『千と千尋の神隠し』  
2001年7月公開

# 『もののけ姫』の衝撃

wildernessとwildnessの強調  
= アメリカ的(非日本的) 印象

- ① シシガミの森という設定：照葉樹の森
- ② 大型の動物：小型化する動物
- ③ 人語を話す動物/話さない動物
  
- ④ 蝦夷、エゾ、縄文的なるもの：アシタカとその一族  
= 滅びゆく先住民
- ⑤ たたら場（非農業的世界）：農的風景の欠如  
= 滅びゆく非農業民
- ⑥ 武士と農民の擡頭を遠景に配置：時代劇の革新

# wildernessとwildnessの強調 = アメリカ的(非日本的) 印象

## ■ アメリカ的wilderness/wildness概念

- 1 基本的語義：An unsettled, uncultivated region left in its natural condition [AHD]
- 2 語源：deer = beast [OE] もともとは動物一般を指した
- 3 wild beast, wild animalの意味を潜ませている

Der- may thus carry on deer in its general sense, reminding us that wild beasts might be the only inhabitants of a wilderness. [AHD: Word History]

■ wildernessにはシカが潜んでいる？ = シシ神

■ Wildnessの強調 → 里山的なものの不在

# ① シシガミの森という設定 照葉樹の森

「木を伐ったその後に出来上がってきた風景が、今僕らが自然と言っている、日本の見覚えのある風景だと思ふのですよ。それを僕らは、自然と呼んでいるけれど、実はその前に深い、恐ろしい自然があつて、そのときの記憶が自分たちの心の底にある。」（宮崎駿「森と人間」p.77）

- ②大型の動物/小型化する動物
- ③人語を話す動物/話さない動物

〈野生〉

山犬（モロの君）  
猪（乙事主）

〈家畜〉

山犬の子ども  
猪（戦士）

猩猩（木を植える）

片言：言語を失いつつある存在

■ 「わしの一族を見ろ。みんな小さくバカになりつつある。このままではわしらはただの肉として、人間に狩られるようになるだろう。」(乙事主の科白)

「ことばまでなくしたか」(モロの科白)

(→『千と千尋の神隠し』のポスター参照)

■ 固有名をもつかもたないか  
(→千尋は千に変えられた)

## ■ 動物が人語を話すのは「擬人化」に過ぎないだろうか？

→この物語では、動物が人語を話すというそれだけで「擬人化」だと判断してはならない。物語という条件下では、人語を話す動物が必要という「制約」も想定されるが、『もののけ姫』の場合は、「コミュニケーションできる主体」(C・マニス)としての野生性が言語と関係づけられていると考えられる。家畜化された動物は、もはや人間と対等の関係にある〈主体〉(subject)ではなく、従属的な関係に置かれた〈客体〉(object)に過ぎない。したがって、「人語を話す」ことは、二次的な、テクニカルな問題を越えて、本質は「コミュニケーションできる主体」の造型にあるのではないか。

## 「コミュニケーションできる主体」 としての動物と言語

もののけ姫のサンは、動物の神と会話をしたり、動物同士が会話をしたりするが、それはことばというより、一種のテレパシーのような感応による通じ合いのように見える。こうした場面での、動物たちの口の動きとあえてリップ・シンクしないことばの発声を示す描写はおもしろい。  
(小野耕世「アシタカが押し通る」)

④蝦夷、エゾ、縄文的なるもの：アシ  
タカとその一族

= 滅びゆく先住民

⑤たたら場（非農業的世界）：農的風  
景の欠如

= 滅びゆく非農業民

⑥武士と農民の擡頭を遠景に配置：時  
代劇の革新

「この作品には、時代劇に通常登場する武士、領主、農民はほとんど顔を出さない。姿を見せても脇の脇である。」

・・・従来の時代劇の舞台である城、町、水田を持つ農村は遠景にすぎない。

・・・これらの設定の目的は、従来の時代劇の常識、先入観、偏見にしばられず、より自由な人物群を形象するためである。」

『もののけ姫』企画書より

## 武士と農民の擡頭を遠景に配置： 時代劇の革新

(たたら場について) なんか、この漂泊の製鉄集団って  
いうのにはずっと魅力を感じていて、映画を作らなくて  
も、それなりに掘り下げるってことはやってたんです。  
『もののけ姫』ではわかりやすくするために、もう工場  
制手工業はそこに存在しているっていう世界にしてしま  
いましたけど、でも、歴史の表面とか、時代劇とかに出  
てこなかったものの中に、魅力のある集団がいっぱい  
あって、日本の歴史っていうのは、結構豊かで奥行きが  
深いんだっていう、そういうことは前から考えていまし  
たから。だから、僕は侍と農民だけの支配と被支配って  
いう、そういった歴史観だけで作ることに我慢ならな  
かったですよ。(宮崎駿『風の帰る場所—ナウシカから  
千尋までの軌跡』、ロッキング・オン、2002、p. 158)

## Ⅱ 脱ウィルダネス論

鬼頭秀一

『自然保護を問い直す—環境倫理とネットワーク』（ちくま新書、1996）

いったい、「原生自然＝ウィルダネス」の保護の理念は普遍性を持つのだろうか。  
(p.111)

もともと否定的な概念であった「原生自然＝ウィルダネス」概念が、一転してポジティブに転換していった過程には、ロマン主義的な心性が影響を与えていた。また、「原生自然＝ウィルダネス」をポジティブにとらえる思想は、その地域に生活し生業を立てて暮らしている人たちの思想ではなく、既に都会化した地域からの旅行者の視点に立つ思想であった。この思想には開拓者の人たちの心性はないし、ましてや先住民の自然との深いかかわりの中の生活も射程に入っていない。そのような意味で、「原生自然＝ウィルダネス」を称揚する思想は、歴史的にも、文化的な意味においても、特定の文脈の中で出現してきたものであることを認識する必要があるだろう。  
(鬼頭、pp.111-12)

# ロマン主義的称揚の対象は wildernessだけではない

「**里山**」を称揚する思想は、歴史的にも、文化的な意味においても、特定の文脈の中で出現してきたものであることを認識する必要があるだろう。

# ロマン主義的wilderness



Albert Bierstadt, The Rocky Mountains, Lander's Peak, 1863.

# 新しい環境倫理 →脱ウィルダネス論

かくして、「原生自然＝ウィルダネス」  
概念を、それ自体普遍的に価値あるもの  
として捉えることなく、時代文脈的、地  
域文脈的に出現したものであることを認  
識し、人間と自然との深いかかわりあい  
のあり方を主軸にした新しい環境倫理が  
求められているのではないだろうか。  
(鬼頭、p.113)

# 『もののけ姫』の自然観 1

田園風景が美しいというのは、人間の傲慢  
であって、畑というのは基本的に他の植  
物が生えるチャンスを奪っているわけ  
ですから、不毛の地という印象が強いです  
しね。自然界からみた生産量からいうと、  
畑になっている土地よりも、ただの荒れ  
野の方が生産量が高いんですよね。他の  
生きものにとってもそれは同じです。

(切通理作『宮崎駿の〈世界〉』、p. 279)

## 『もののけ姫』の自然観 2

人間が普通につつましく暮らしている分には自然と共存できて、ちょっと欲張るからだめになるということではなくて、つつましく暮らしている事自体が自然を破壊しているんだって認識にたつとどうしていいかわからなくなる。どうしていいかわからないところに一回行って、そこから考えないと環境問題とか自然の問題はだめなんじゃないかなって思うんです。  
(切通理作、pp.279-80)

## 他者論的転回

砂漠では、人間は直接世界と出遭う。それは人間の意識の投影としての世界ではない。そうではなく、それまで芸術や科学や神話による解釈を受けたことのない世界、その上に人間の足跡のない世界、あの自閉した人間の世界といかなるつながりも持たない世界だ。砂漠では、ひとは直接向き合う。あの存在の骨格、あのむきだしの、理解不能な、絶対的な「在る」という状態(is-ness)に。

(Edward Abbey, *Confessions of a Barbarian*, 185)

# むすび

人間と自然が相互に主体(subject)として向き合う状態、優位/劣位の位階関係に陥ることなく向き合う状態を対等で対話的な関係だとするならば、そしてそのような対話的關係の地平を希求するのであれば、そこに姿を現す自然は固有の世界を内包する自立的な〈他者〉であることを絶対的な条件とする。「人間の意識の投影」としての世界ではなく、そのような人為の介入を拒絶する他者性を帯びた世界。それこそが逆説的にも「コミュニケーションできる主体」である可能性を思惟すること。他者性（＝野生性）こそが「コミュニケーションできる主体」の前提となるのではないか。

## 参考文献

- 渡辺憲司、野田研一、小峯和明、ハルオ・シラネ編『環境という視座—日本文学とエコクリティシズム』、勉誠出版、2011.
- 「特集 エコクリティシズム」『水声通信』no.33、水声社、2011.
- 「インタビュー 宮崎駿 森と人間」、『もののけ姫を読み解く』（別冊コミックボックス②）、ふゅーじょんぷろだくと、1997.
- クリストファー・マニス、城戸光世訳「自然と沈黙—思想史のなかのエコクリティシズム」、ハロルド・フロム他『緑の文学批評—エコクリティシズム』、松柏社、1998.
- 小野耕世「アシタカが押し通る」、「総特集 宮崎駿の世界」、『ユリイカ』8月号臨時増刊、青土社、1997.
- 宮崎駿『風の帰る場所—ナウシカから千尋までの軌跡』、ロッキング・オン、2002.
- 鬼頭秀一『自然保護を問い直す—環境倫理とネットワーク』（ちくま新書）、筑摩書房、1996.
- ツヴェタン・トドロフ(Tzvetan Todorov)、及川、大谷、菊地訳『他者の記号学—アメリカ大陸の征服』、法政大学出版局、1988.
- 切通理作『宮崎駿の〈世界〉』（ちくま新書）、筑摩書房、2001.
- Edward Abbey, *Confessions of a Barbarian: Selections from the Journals of Edward Abbey, 1951-1989*. Ed. David Petersen. Boston: Little, 1994.
- 北條勝貴「〈書く〉ことと倫理 — 自然の対象化／自然との一体化をめぐる—」、『GYRATIVA』第3号、方法論懇話会、2004
- 北條勝貴「環境問題と日本文化—自然との新たな関係をめざして」、方法論懇話会編『日本史の脱領域—多様性へのアプローチ』、森話社、2003.